

この報告では、アンソニー・ギデンズの社会学的業績から、ミクローマクロ・リンケージ問題、モダニティ論、社会学ないし社会学者論という3つの論点についての議論を取り出し、その達成点を明らかにしたい。第1の論点は、いわゆる一般理論、原論にかかわり、第2の論点は、古典的社会学者以来の社会学の本来の課題である近代・現代の諸トレンドの把握にかかわり、第3の論点は、社会学のアイデンティティ問題にかかわる。

第1のミクローマクロ・リンケージ問題については、ギデンズの構造化理論の解釈を、行為と構造の関連如何という視点にとどめることなく、「場と全体」という視点、および「可能性としてのパワー」という視点を提起したい。それはギデンズ社会学の全体像を把握することによって、そこに潜在する可能性として浮かびあがってくる視点である。したがってギデンズの諸著作から、「場と全体」の具体例をいくつか示すことができる。また、ギデンズ自身はやや曖昧ではあるが、「資源の相互媒介的動員の可能性」としてのパワー概念を設定することで構造化理論は理論的整合性を獲得するのであり、さらにそれはまた集合的主体論、運動論へと接合される。

第2のモダニティ問題については、ギデンズが唱えるハイ・モダニティ（高度近代）論の意義を、ポストモダニティ論批判の諸論点の検討を通して、あらためて強調したい。ギデンズのポストモダニティ論批判の要点は、ポストモダニティ論が示す認識論への過剰な執着、主体の過剰な脱中心化、構造の過剰な遠心化、モダニティの過剰な実体化にある。認識論的には過剰な相対主義は百害あって一利もなく、主体や構造の存在論についても相反する特性を統合的に把握する弁証法的視点が不可欠である。さらに、ポストモダニティの社会理論に欠けているのは、現在の変動が含むトレンドがモダニティの徹底化に起因しているという認識、そしてモダニティすなわち近代性と、近代とよばれる時代の社会が示した特性とは区別されねばならないという認識なのである。